



## ○ アクティブ・ラーニング

つづりは active learning です。簡単に訳せば、「能動的・主体的な学習」という感じです。少し説明をするならば、一斉に講義を受けて学習内容を丸覚えするような学習ではなく、学習者が自ら調べたり発表したりして積極的に行う学習のことです。今、全国的にこのことばが盛んにつかわれるようになってきました。なぜでしょう？

コンピュータの発達などによる情報化社会や国際化がこれからも進展していくことは間違いないでしょう。そういった時代を生きていく子ども(学生)たちはどんな学びを身につけておかなければならないか、だいたい想像できますね。カタカナ文字を多用するのは個人的には嫌ですが、意識しなければならないことばだと思います。

自分は能動的に主体的に学んでいるだろうか? 「調べる・発表する」などのような形に表れるものだけでなく、先生の説明を聞いているだけの場面でも「能動的・主体的な学習」はあります。受けている学習内容を単に記憶するだけでなく、おもしろがる気持ちです。また、学んだことがらに興味をもち、関連することを想像し、学びを拓げていく意欲もそうだと思います。

“させられる”ものはおもしろくありません。ノルマをこなすだけになってしまいます。勉強だったら入学(検定・資格取得)試験だけが目標になってしまいます。各種の入学試験等は通過点(門)です。通った(合格した)あとの学習の方がより重要です。まさにアクティブ・ラーニングの世界ですね。どんな仕事に就いても皆同じでしょう。生活のためというだけでなく、生きがいのためにも大切なものだと思います。

幼児から小学校低学年ころまでは基本的には全員アクティブです。でも成長段階のどこかからそうではなくなってくる人が多いです。私は長年中学校の美術教師として子どもたちを見てきました。中学生たちの年齢はまさに思春期真っ最中です。心の中はアクティブでも言動には現れない(表さない)生徒のほうが大半です。中には表し過ぎる生徒もいますが、少数派ですね。

小学校に転任したとき、児童のアクティブさにびっくりしました。特に1・2年生はそうです。鬼ごっこを始めてしまったら最後、体力とともに肉離れやアキレス腱を心配しながらの格闘になります。スポーツだけではなく、算数の計算ができた達成感、文字が書けるようになった喜びなど、子どもたちは毎日おもしろがり、学びを拓げていきます。

私は臨時免許で中学2年国語の授業を担当したことがあります。高校入試にある教科ですから、かなりのプレッシャーのもと教材研究をしっかりと行い、授業に臨んでいました。するとかつて自分が中学生の時にはおもしろくなかった「文法」の奥深さが楽しめるようになりました。主体的な学びはおもしろさと呼び込んでくれますね。このことについてはまた機会があればご紹介します。

### 自校自賛

「今どきの若いもんは。」ということに関連して ~

大学生の講義中の私語やスマホ操作の話題から、私は着任前には少々心配していました。しかし本校の学生は大丈夫でした。皆真剣に受けています。卒業後の目標進路が明確であることもその要因だと思います。動きは少なくともアクティブ・ラーニングの状況です。欲を言えば、よりアクティブになれる余地があるので、それは今後期待です。



子ども学科2年生 国語I